

秋色 しゅうしき 下

平岩弓枝

文春文庫





文春文庫

秋色下

定価はカバーに
表示してあります

1990年9月10日 第1刷

1994年3月5日 第10刷

著者 平岩弓枝

発行者 堤 堯

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-716849-9

文藝文庫

江苏工业学院图书馆

秋色
藏书章

平岩弓枝



文藝春秋

目次

自信 7

葬送 26

流れ 45

朝 65

誤算 85

巢 104

くちなし 124

夏 145

情報 164

工事 183

水の下 203

花屏風 222

初霜 242

遺産 262

ホテルにて 281

婚約 302

落花 321

名誉 340

秋色 358

秋^{しゅう}

色^{しき}

下

自信

真田健二は長いこと、マンションの玄関で待っていた。
が、帰って来たのは奈津江のほうであった。

「世紀さんからお電話がありましたので……」

一緒にエレベーターを上って、奈津江の部屋へ入った。

テーブルの上には、先刻、真田がこの部屋に入った時にみた世紀のメモが、そのまま、おいてある。

信 「あの子、どこへ行ったのかしら」

「さあ」

7 自 真田にも見当がつかなかった。ついていれば、マンションの玄関に立っているまでもなく、世紀のあとを追いかけて行っている。

「真田さんには、なんて電話したのよ」

「今野菊子さんが、銀座の店へおみえになったかと……。それと、指輪がどうかしたとか……」

「あの子、こだわってるのかしら」

「世紀さんに、なにを話したんですか」

奈津江が自分の指を眺めた。薬指に猫目石が光っている。

「オパールの指輪のことよ」

「オパール……」

「気がつかなかったの。あの晩、菊子さんがはめてたオパールの指輪、あたしとおそろいだったのよ」

勘のいい真田は、それだけで或る程度のことを推量したらしい。

「あちらが、気づかれましたか」

「わからないわ。なんにもいってなかったから……」

「世紀さんは、そのことを心配したんですか」

「心配することはないのよ。こっちは別に知られたってかまやしない」

「今野先生がお困りになりますね」

奈津江が片膝を立てて、足の爪を切りはじめた。

「あたしの知ったことですか」

自信たっぷりなの、その横顔をみていて、真田は少々、意地悪な気分になった。

「あちらの奥さんが、黙っているでしょうか」

夫に女がいることをであつた。

「さあ、どうかしらね」

「一般的には、腹を立てるでしょう」

「今野を責めるかしら」

「別れてくれというんじやありませんか」

「今野が、なんというか、たのしみだわ」

他人事のようにであつた。

「今野先生にしても、社会的な地位や体面がおりでしようから、簡単に離婚なさるとは思えませんよ」

「別れなけりゃいいじゃない」

「手を切ってくれといわれたら、どうするつもりですか」

「あたしが手を切るの」

行儀悪く、とばした爪を真田が拾い集めている。

「今野はあたしと別れませんよ。あたしが別れるといつても彼のほうがいやだというわ」
黙って、拾った爪を屑箱へ入れている真田の背へ視線を向けた。

「あんたは、あたしが菊子さんに負けると思っているの」

「いや、そういうわけじゃありません」

「思ってる筈よ」

忍び笑いが広がって、真田はふりむいた。

奈津江はテーブルに頬杖を突いて、窓のむこうをみつめている。

「常識的にいえば、五十代の女が三十代の女に敵いっこないでしょうよ。でもね、それは普通の女の話。あたしの場合は普通じゃないから……」

真田は爪切りを取って、居間の整理箆^{だんす}のひきだしにしまい、奈津江の正面を少し避けてすわった。

「勿論、社長はお若いですから……」

奈津江の肉体が、到底、五十代とは思えないほど美しく魅力的なことは、始終、彼女の着がえをみせつけられているから知っている。

「外見じゃないの。中身の問題……」

声に出して奈津江は笑った。

「多分、あたしのほうが菊子さんより上等よ」

うつむいた真田に、悪戯^{いたずら}っぽい声が絡みついた。

「なんなら、あんた、ためしてみる」

真田は慌てて手をふった。

「僕は菊子さんと寝たわけじゃありませんから、社長と比較は出来ません」

「寝てみるといいのに……」

「冗談じゃありませんよ。むこうさんが僕なんかを相手にする筈がないじゃありませんか」

「あんたはセクシイよ。自分で思ってる以上に、女にもてるわ」

「もてませんよ」

「店の子がいつてるわ。浮気がいいから、あんたと寝てみたいって……」

「馬鹿馬鹿しい」

「あんたとあたしが出来てると思ってる子もいるみたいよ。それで、くどきたいけど遠慮してるってわけ……」

「勘弁して下さいよ、社長……」

笑ってごま化すしかなかった。奈津江にいわれるまでもなく、「クラブ夏生」のホステスたちに誘われるのは、毎度のことであつた。

単なるバーテンではなく、「夏生」のマネージャーでもある真田とねんごろになつておいて損はないと考えている女もいるだろうが、本気で真田に惚れている女もないわけではなかった。銀座の夜を働く男たちは、そうした女を見事なくらいにさばいて行く。

真田にしても、まるで女なしで暮しているわけではなかった。ただ、決して「夏生」で働くホステスとは、かわり合いを持たなかった。

店の女に手をつけないというのは、マネージャーの鉄則だが、現実にはなかなか、そうも行かないのが男女の仲である。

だが、真田は絶対に「夏生」の女には手をつけなかった。

奈津江に知られるのが怖かったからである。

奈津江が知れば、奈津江の口から、世紀の耳に入る。

同じ理由で「夏生」の女だけではなく、銀座の中では遊べなかった。狭い世界だから必ず、知れるのがわかつているためである。

「とにかく……」

辛うじて、真田は話題を変えた。

「世紀さんのためにも、軽はずみなことはしないで下さい」

今夜は外出をしないという奈津江のために、真田は広尾のスーパーまで、食料品の買い出しに行き、台所で久しぶりに包丁を持った。

一つには、そうしている中に、世紀が帰ってくるだろうと思ったからである。

だが、筍^{たけのこ}御飯に鯛のお造りとかぶと煮が出来上っても、世紀は戻らなかった。

「あんたも一緒に食べて行きなさい」

奈津江にいわれても、真田は給仕をするだけである。

後片付をしている時に、世紀からの電話があった。電話口に出たのは、奈津江である。

「へえ、そりゃよかったじゃない。いいわよ、あたしはすませたから……。はい、はい、どうぞ、ごゆっくり……」

台所で耳をすませていた真田は慌てて、居間へ顔を出した。奈津江が受話器をおいたところであつた。

「世紀さんからですか」

「そうよ。あの子、椿井先生と一緒にだつて」

そうではないかと、真田が考えていた名前が、奈津江の口から出た。

「どこにいるんですか」

「どこって聞かなかつたけど、代々木公園でお花見をして、夕食、御馳走になったって」

「代々木公園……。それじゃ、原宿か青山ですかね」

「そうでしょうよ。先生とカリキュラムとかの相談をして帰るから、もう少し、遅くなるって……」

真田は時計を眺めた。

八時を過ぎていた。

「いいんですか、こんな時間まで……」

「なにいつてるの。まだ、宵の口よ」

確かにその通りであった。

「先生と一緒になんだもの。心配することはないわよ」

先生といっても、若い男だといいたいのを、真田はやめた。奈津江は、そんなことは先刻、承知の上で、椿井新八郎と世紀の接近を許している。

エプロンをはずして、真田は奈津江に暇を告げた。

マンションを出て、真田の足はなんとなく六本木のほうへむいた。

このまま、自分のマンションへ戻るには、胸の中がもやもやしすぎている。

土曜日の夜でもあった。

六本木のはずれに、真田の行きつけの店があった。旨いコーヒーを飲ませる店で、真田はそこで自分用のコーヒー豆を買っては、ひいてもらって来る。

桜の季節というのに、夜はまだうすら寒かった。

それでも、歩いている人々の服装は、すっかり春であった。

木綿のブルゾンのポケットに手をつ突っ込んで、真田は道の両側を眺めながら歩いた。ブティックの店と小さなレストランが圧倒的に多い。

六本木が若者の町といわれる所以でもあった。

いつか、自分も小さな店を持ちたいと真田は考えていた。

が、それは、若者向の店ではなかった。

むしろ、中年から高年の客を相手にしたカウンター割烹かっぽうの店である。

とかく、高価なというイメージの強い関西割烹を、気軽く、廉価で食べさせる店を作ったら、客は集るに違いない。

その資金となる金を、真田は貯めようとしていた。

「クラブ夏生」からもらっている給料は、真田の年齢のサラリーマンよりも、高額ではあった。他に少々の役得もある。それでも貯金はなかなか目的に達してくれない。

それと、そんな店を持つようになったからといって、世紀が真田と結婚してくれるかどうか、全く、あてに出来なかった。

世紀は大学をやがて卒業する。

真田は高校卒であつた。

学歴なんぞ、人生にたいして影響はないと真田は信じているが、世紀がそう思ってくれるかどうか。

一軒のブティックに真田は寄つた。

このニットの服を、世紀が好んで着ているからであつた。

並べてあるのは、どの棚も初夏のためのセーター、カーデイガン、チョッキなどであつた。

麻や木綿の糸で、たつぷりと編み上っていて、如何にも着やすそうであつた。

マリンプルウのセーターを、真田は手にとつてみた。

右の胸のあたりに、錨いかりの模様が編み込んである。

値段はけっこう高かったが、真田はそれを買つた。

これまでに、散歩のついでにみつけたからといって、時折、世紀にこの店の品物をプレゼント

トしてゐる。

その度に、世紀は大喜びで、真田の手からそれを受け取っていた。

翌日曜日、真田は広尾の高級スーパーマーケットで、献立を考えながら、魚介類と野菜の買い物をした。

その足で、麻布のマンションへ向う。勿論、昨夜、買ったセーターの袋は、彼の小脇にしっかりと抱えられていた。

奈津江の部屋のプザーを押すと、世紀がドアを開けた。

「あら、いらつしやい」

いつもの明るい笑顔をみただけで、真田は幸せな気分であった。

「昨日の筍御飯、とても、おいしかったわ」

「昨夜、食事、外じゃなかったんですか」

電話では、椿井新八郎と一緒に食べたということだった筈だ。

「今朝、頂いたの」

「それじゃ、昨夜ほど旨くなかったでしょう」

「でも、おいしかったわよ」

リビングに続くテラスで、奈津江は体操をしていた。

愛用のサウナスーツとかいう代物を着て、首にタオルを巻き、自己流で体を動かしている。如何にも暑そうな顔で、額からは汗が流れ落ちていた。

「今夜の食事の材料、仕入れて来ました」

紙袋をみせると、笑って手を上げる。